

## 日常と調査

はぎわら  
萩原 ふみたか  
文隆

●電機連合・中央執行委員（総合研究企画室長 兼 教育部長）

「この世界の片隅に」というアニメーション映画がこの秋に公開されます。いい大人がアニメの話かといわれるかもしれませんが、ちょっとお付き合いをいただければと存じます。

原作は、この史代氏で、「夕凧の街 桜の国」という作品をご存知の方もおいでになるかもしれません。この「この世界の片隅に」は戦時中の広島県呉市を舞台にした作品です。呉は、広島駅から現在では電車で30分ぐらいの距離にある街です。戦前、戦時中には、いわゆる軍都として栄えた地域です。

この作品の内容は、18歳でお見合いをし、広島から呉に嫁いできた「北条すず」が主人公です。戦時中、しかも広島という一つのストーリーが皆さんには浮かぶかもしれません。もちろん、彼女の周りにも原子爆弾による過酷な運命がおこります。しかし、この作品の特徴は、戦時中であっても市井の人たちは生きていくために日常生活を送っていることが淡々と描かれていることです。時代考証もしっかりされています。だからでしょうか、戦時下という極限状態ではありつつも、それを受け入れながら、現在の生活と何が変わるのかというような日常生活も営まれています。もちろん、空襲もありますし、強制建物疎開により家が取り壊されることも起きています。また、国威発揚が最優先される「異常な状況」であり、個人の思想あるいは感情まで統制されざるを得ない状況であったのでしょうか。もし、この時代に意識調査を実施したとしても「結論」は想定される気がします。

さて、現在において、様々な機関で「調査」と称するものが行われています。特に、これだけの情報通信が発達した時代では、その「調

査」結果が独り歩きをして、あたかも「民意」であるかのように扱われていることがあるような気がします。これは、子どもが「(おもちゃをねだり)『みんな』持っている」という時の「みんな」に似ている気がしてなりません。調査は私たちの「武器」になります。しかし、一方で、私たちに対する「凶器」にもなりかねません。「調査」を扱う者はそのことに自戒を持って当たらなければならないとも思っています。

さて、話が戻ります。「北条すず」はあまり気持ちを強く表には出しません。それは個人の性格かもしれません。それでも、幾度か感情を激しく表す時があります。それは当然のことです。もちろん「戦争」が原因の時もあります。また、どの時代にもありうる「日常」の出来事に対することもあります。しかし、戦争状態すら日常生活となってしまうと、その状況のなかで「生活」することがまさに「日常」になってしまうのかもしれません。わかりません。

しかし彼女は気づいていると思います。「何かおかしい」、でも、生活をしていかなければならない。だから、これが当たり前と思いたい、そして、そのために自分を抑えてきたことに耐えられなかった時が何度もあったのだと思います。

振り返って、今の私たちの暮らし、社会を平静に見たとき、どのようなものなのでしょう。

もしかすると、未来の社会からみて「現代」が「極限」の状況と評価されることがないことを願っています。そのようなことがないように、さまざまな意見に耳を傾ける、意見を吸い上げる、そして、それを活かしていくこと、それが「調査活動」ではないかと改めて考えました。